

## はじめに

今、我が国の大学・短大は、大きな変革期にある。これは、学部・学科の再編とか学内組織の変革といった組織上の問題にとどまるものでない。カリキュラムの面で、日常の講義・演習等の面で、さらには学生のキャンパスライフの支援の面で、大きな改善改革の課題を突きつけられている。もはや、5年前、10年前と同じ形で教育を行っていくわけにはいかないのである。

この理由の一つは、少子化と大学・短大の新增設とがあいまって、進学率の大幅な向上がもたらされていることである。このため、従来は高等学校までで教育を了えていた多くの若者が、大学・短大に進学して学び始めている。したがって、学習意欲や将来展望、大学等のカリキュラムをこなすための基礎学力の点などで、従来通りの教育ではとうてい対応できない状況が出てきているのである。また、進学率の大幅な向上は高等学校卒業後の進学を誰にとっても当然のこととしつつあるため、幼少のころから大学進学を目指す受験準備に翻弄されやすくなってきている。このため、大学等に入学の後に、学力面でも人間的成長の面でも、ひずみやゆがみの見られる学生が多くなってきている。このこともまた、従来通りの教育のあり方ではとうてい対応できない、という状況をもたらしているのである。

もちろんこれに加えて、社会そのものが変化しつつあり、その中で大学・短大に期待される教育の内実が変わっていかざるを得ない、という事情もある。社会に出てから果たすべき役割、そこで必要とされる技能や資質が、大きく変わりつつあるのである。少なからぬ大学・短大で、専攻の別に関わりなくインターネットの活用を含めコンピュータの操作ができるようになることを必須の卒業要件としつつあることは、このことの典型的な現れと言ってよいであろう。ごく少数のエリート候補者が、将来責任ある立場に立った際に総合的な視野からの判断を可能にするため豊かで広い教養を身につけておく、といった古典的な大学像は、今や完全に時代後れである。また、少数のエリート候補者の教育の場合には許されていた学生の履修上の自由度（出席しようが欠席しようが自由、どんな科目をいくつとっても自由、学習到達度など考えないで自分なりのレポートを書くだけで単位を与える、等々）も、ある程度までは制限されることにならざるを得ない。さらには教える側についても、相手の学生が分かっているかどうかにはまったく無関心なまま、自分の学問上の関心をそのままストレートに語っていく、といった講義スタイルが時代後れであるのは自明のことと言わねばならないのである。

以上のような事情によって、今、大学・短大等における教授法の改善改革が大きな課題としてクローズアップされて来ているのである。しかし、そうした改善改革の基礎資料となる研究は、まだ必ずしも豊富とは言えない。本叢書に収録したわれわれの研究は、こうした問題意識を共有しつつ、大学教授法の改善改革に資する基礎資料の蓄積を図っていかうとする取り組みの一環をなすものである。

内容的には、大学で現に教育を受けつつある学生の意識の面から大学教育の改善改革の方向を明らかにしようとするという研究報告と、諸外国における大学教育改革の動向を綿密に調べることによって我が国の大学教育の改善改革に資する研究報告との2つに大別される。これらの研究を遂行する過程において、何度か各研究分担者に集まっていたが、それぞれの研究の構想や途中経過、収集された資料や中間的な結果について討論する機会を持った。その意味において、ここに収められている報告は、われわれ皆の共同研究の成果、という性格をも持っている。

この研究の過程で御助言御助力いただいた多くの方に、深く感謝の意を表したい。

また、お気づきの点など、忌憚なく御批判後叱正いただければ幸いである。

1997年6月30日

梶田 毅 一